

【論文】「祭のつながり」 —「社会安定装置」としての可能性—

遠藤 由起

日本大学大学院総合社会情報研究科

Reliability through the Festivals

—Festivals have been potentials as a [Stabilizer in Human society]—

YUKI Endo

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Festivals can bring people together and revive their ability to live. Notably, Festivals bring people together and unite people from different positions, countries and religions. Such connections and bonds between people, people and society through the festivals are effective in supporting and helping each other to recover from crises on social issues such as disaster and the spread of infection.

In addition, It may be one of the ways to solve the extensively problems in modern society caused by discrimination, prejudice, loneliness and alienation.

Various festivals in modern society, where holiness is fading, are also recognized for their unique significance and connection. It is that it is a connection and support based on trust between people and communities. Trust and reliability in such festivals will be the foundation for stabilizing society and human relations from uneasy social situation.

This thesis is considering based on some example how the connection nurtured through the festivals and works or effects as a stabilizer for communities and human society.

1.はじめに

日本人は祭¹が大好き²だといわれ、昔から日本の各地で様々な地域独自の祭が行われている。他方で、世界中のいかなる民族、集団、社会にも祭は存在し、祭はその集団や社会を体現しているともいわれる。そして世界中の祭の根幹には社会や集団の安寧と豊穰、永続への祈りが共通して存在する³、とされる。

2021年5月現在、2019年末から新型コロナウイルスの感染拡大はいまだ世界的な流行に終息の兆しを見せていない。この問題と社会における危機的な状況は、様々な側面に甚大な影響を及ぼし続け、人類と社会はこの新たな危機に対応し、変容を迫られている。それはまた一面で、人類の在り方や人間の生活と密接な関わりにある文化⁴への見直しを迫るものでもあるといえるだろう。その祭の根幹には、冒頭でふれたように集団の安寧や豊穰などへの人々の祈りが存在し、他方で祭を通じた「つながり」というもう一つの重要な文化が内在している。しかしコミュニティ⁵の祭や「つながり」は一方で、文化とその価値を

狭い地域や共通項を共有する人たちのみにある程度固定化させてしまい、その範疇にはない人たちを排除してしまいかねないという負の側面を持っている。祭の形式やしきたりの維持と継承の問題にとっては変容を余儀なくされることは、一見マイナスに働くようにも見えるが、実は決してそうではない。興味深いことには、古い歴史を持つ祭ほど、その時代時代に沿った簡便化や新たな要素を取入れるということを柔軟に行なってきた。

感染症の世界的な流行拡大や震災などの自然災害など様々なリスクに対して、文化にはその構造上、強靱かつレジリエントな力を有効に発揮する可能性に満ちている。本稿では人類にとって重要な文化である祭とその祭による「つながり」の意義と価値を捉え直す。また多様化とグローバル化の進んだ現代の人類社会における人と人、人と社会との結びつきや関わり方に関連させつつ、祭とそのつながりが持つ「社会の安定に寄与する装置」の一つとしての可能性を考察する。なお「社会安定装置」という概念について

は、第6節以降で詳しく触れる。

2.文化人類学の「ホーム」という視座から捉え直す日本の祭

日本の各地には地域に根差した数多くの祭があり、そのような多様な祭を日本の人々は大切に暮らしてきた。昨今では祭が行われるコミュニティのみならず、ときには国境さえも越えたところからやってくる人々によって、祭が執り行なわれ継承と維持が図られている。都市型祭礼とよばれるような大きな祭では、大勢の観客の中に、そのような様々な地域や国から参加する者の姿が認められることが多い。観客もまた祭を作り構成する者たちといえる⁶。

日本の祭においては、稲作との関連とコミュニティに代表される集団で担われる祭が多いことから、祭は日本の多くの人々にとって故郷や日本の基層文化と関連づけて語られ、想起されることが多い。例えば倉林正司はある学生の「祭はこころのふるさと」という表現を紹介し、祭は日本人が歴史とともに育ててきた「心の広場」であると述べている⁷。また柳沢新治も、祭は日本人の歴史と共にある⁸、と述べている。これらは現代の文化と文化人類学分野における日本人研究者たちから見た、祭に関する無数の定義と解釈の一例である。大正時代に日本の民俗学を始めた柳田國男は、神の降臨から祝祭の論理を論じ、「籠る」ことつまり酒食で神をおもてなしする間に一同が神の御前で侍坐することが本来の「マツリ」であった⁹と論じた。いずれにせよ、日本の祭は人々にとって自身の生命や生活と根源的に関わるものとして捉えられている。

本節では、このように日本人にとって根源的な存在ともいえる祭とそのつながりに関して、文化人類学的に見た「ホーム」という概念からの捉え直しを試みる。「ホーム」は非常に多義的で様々な位相を含んだ言葉である。文化人類学的な視座に限っても多岐に渡った言葉の意味が提出されている。ここでは定着、非定着を問わず「居場所」¹⁰あるいは「居場所」として集団や個人にとって求められうる場所や空間、という定義を用いて考えてみたい。国境を越える移動が常態化した現代社会では、人々にとってのホームや故郷はもはや固定化したものではなく、ある一か所とはいえず、また時間的に継続して人々の中で存在し続けるものとも限らない。他方で、そのように越境を容易に行ない、グローバル化した現代社会に生きているために、自分の出自やアイデンティティが確認されるようなふるさと、あるいは固定というよりは安定的な自らの居場所であるような場所¹¹、空間をホームとして位置付けるといって一面が認めら

よう。

日本で稲作を行なう農村の場合は、稲作と場所に定住を強いる生業の方法が採用され、社会を作ってきたという歴史があった。日本の祭は生業を営む比較的狭い集団内で、そして時代が下るにしたがって成立してきた都市においても、人々に自らの出自や所属あるいは自己同一性ともいわれるアイデンティティを確認させるという働きを担ってきた。他方で所属集団やアイデンティティの枠組みを越えて、外へと働きかけ祭に参加するすべての人々を、祭の営まれる場所のみの共有を超えて結びつけてきたともいえる。ホームという概念を借りて捉え直すとするれば、日本の祭は各人の出自に基づくふるさとに深く根差したものと捉えられる一方で、各人や地域、時代の様々な要請に応じる形で捉え直されうる自分にとっての居場所、空間であるといえるだろう。

3.変容する祭とつながりの文化の価値—田島祇園祭の歴史的経緯から

はじめに、社会が文化を形成し維持継承することで、人類社会が変容を余儀なくされると述べた。したがって、文化とその価値もまた変容を迫られること、そのような変容や新たな要素の追加が、文化自体の存続と発展に大きな意味を持つと論じた。本節では、祭を通してつながりがどのような形で変容し、そのことが人類社会にとっていかなる文化としての価値や役割を担いうるのか、相互作用と文化の価値をキーワードに筆者の居住する田島祇園祭の事例から検討を加える。

田島祇園祭は、福島県南部に位置する南会津町で毎年7月22日から24日の三日間にわたり行なわれる夏祭の一つである。町内の田出宇賀神社と熊野神社が牛頭天王須佐之男命を祀る祇園祭である一方で、この祭は地域の人々による「お党屋組」が主体となって祭の行事一切と継承を行なっている。この地域の人々の手によるお党屋制度は、「田島祇園祭のお党屋行事」として昭和56年に国の重要無形文化財に指定された¹²。祭の歴史は八百年余りと古い。鎌倉時代初期の文治年間にこの地を治めていた時の領主長沼五郎宗政が、一族の信仰する牛頭天王須佐之男命を勧請し、田島の地に古くから祀られてきた田の神である、「田出宇賀の神」¹³と共同で祀られることになった¹⁴。そして宗政の孫盛実の代になると、京都祇園祭を模して祭典が行われるようになった¹⁵。この時代から左近、主膳、外記の三名がお党屋本陣を一年交代で勤めるようになったとされる¹⁶。現在でもこの当時に始められた神輿渡御において三つの家がそれぞれ一年交代でお党屋本陣¹⁷を担い、古くからの形や制度を

受け継ぎ、あるいは変容させながら祭を実施している。

有機体としての文化は、そのものに存続させるために変容や発展を遂げるというシステムを内在させている。特に祭は毎年決まった時期にこれを執り行なう、周年性という大きな特徴があるため、その時々々の社会的、時代的な影響を受けやすく、反映されやすいともいえよう。一方で祭を担うのは人間である。人間は自分たちが構成する社会や集団のために祭を生み出し、存続させているのであるから、人間と人間を取り巻く環境、またその集団を構成する人間同士の相互作用によって祭そのものが改訂される。祭を取り巻く時代の要請に対し、改変の不可避な状況であっても、その程度や方法はさまざまであり、そのことが文化の多様性や継承への可能性を高めるともいえる。それはまた、それぞれの祭の独自性にも通じている。

田島祇園祭は、先述のとおり八百年以上の歴史を持ち、祭の存続と継承には幾多の困難とそれを乗り越えてきた変容と持続の歴史が見て取れる。田島祇園祭の歴史でよく取り上げられるのが、領主の移転に伴って祭の存続が途絶えた時期と、住民の「再興願」という熱意によって祭が再び復活し、その後数百年にわたって持続されてきたことである。祭が途絶えると町の役人の連名で「再興願」が出され、新たな領主は人々の熱意とおそらくはこの祭の重要な効果と役割とを鑑み、長器の使用を禁じたのみ¹⁸でほとんどそのままの形式としきたりによる祭の再開を認めた。

田島祇園祭のもう一つ大きな特徴は、住民主体の「お党屋制度」というシステムによって継承と維持が図られてきたという点である。筆者は田島祇園祭が毎年開催される田島町(現南会津町)で生まれ育ってきた。個々人と祭の関わり方は、個人の数だけ存在するものの、筆者と同世代の地元の人々の多くが、この地の田出宇賀の神や牛頭天王への信仰と祭の結びつきより、一年に一度だけ行なわれる集客力の非常に大きな町内行事、イベントという面をより強く共有してきたと思われる。それは古い祭の現代的な位相ともいえるだろう。逆に言うと、特に柳田國男が「祭礼」¹⁹とよぶような観客を呼び込む大きな祭は、神事や信仰という要素が退却あるいは表面的には薄れて見える。しかしながら、八百年を越える祭の存続には、神事と信仰の存在によるところが大きい。「神様事(かみさまごと)」という言葉や、祭の準備や行事の中でずいぶんと耳にした。またそれは特に神社の関係者よりもその年の祭を担う町のお党屋組の人たちの言葉に多かった。一方で、この祭を担う者たちに

とって、負担は依然として大きい。筆者の聴き取りでも、現代のお党屋本、お党屋組の人たちは会社勤めの人たちがほとんどであった。2020年度のお党屋本は、経済的な負担は免れない。コロナ禍というかつてない事態に見舞われた一年となったが、なんとか祭を途絶えさせないように、次世代に受け継いでいくことを大事に考えたい、と話していた²⁰。祭を中心になって担う人たちの構成も大きく様変わりした。かつては狭いコミュニティ内の人々やその親類が多数を占めていた参加者は、現在ではコミュニティはもとより、自治体や国の境を軽々と越えている。世代も万別である。このように多様で幅広い背景にある人たちがともに祭という共通の目標に向かって力を結集するからこそ、年に一度の大きな年中行事が成功する。また他方、そのような多様な背景にある人々の違いを超えて一つにまとめられることも祭という文化の持つ重要な力である。

継承と改善という住民主体の意思と創意工夫の積み重ねによって、町の規模にしては大きすぎる²¹といわれるこの地域の祭は、現代の位相の中に伝統と回復を併存させた姿で息づいている。そしてその土台には、長く続いてきた町の人々の神への信仰とその存在の認識に裏付けられた祭への思いと愛着がある。文化は、比較的变化しにくい安定性があることで世代を超えても受け継がれる²²。それが一時的な流行とは異なる特徴である。他方で文化は動的であり、文化を構成する要素との相互関係の中にある緊張によって、時代と共に変化する²³ものでもある。ともあれ歴史的な縦の文脈と、越境する人々の横の文脈に支えられる祭を通して人と人、人と社会とのつながりが、時代に応じる形で変容と改善を遂げながら持続されているのである。

4.相互の絆と減災に向けた祭のつながり

本節では、祭という文化が実際に社会においていかなる意義や価値を持ちうるのか、特に自然災害や感染症の流行拡大などの非常事態の事例から検証を試みる。

政治学者のロバート・パットナムは、1993年に「ソーシャル・キャピタル」という概念を提起した。パットナムはソーシャル・キャピタルについて「協調的行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼・規範・ネットワークなどの社会的仕組みの特徴」²⁴としている。稲葉陽二は、このソーシャル・キャピタルについて、協調的行動が市場を通じた損得勘定によるものではなく、市場を通さない外部性として生まれることが多い²⁵と述べている。加えて、日本の祭、都市祭礼はこのソーシャル・キャピタルの総

合醸成器であり、祭のソーシャル・キャピタルは文化そのもの、またその醸成が祭の中の無形文化資本を生む²⁶としている。山田浩之は、東日本大震災以来、絆の重要性が語られることが多く、絆の社会科学的表現がソーシャル・キャピタルである²⁷、とする。震災直後、あるいはその後の復興過程、感染症の世界的な流行拡大といったいわば社会の危機的状況において、人と人のつながりやそこから生まれる助け合いである絆が日本でいかに重要な働きを持つのか注目されるようになった。

前節では、田島祇園祭の例から、歴史的な縦のつながりと地域やカテゴリーを超えた横のつながりに焦点を当て、祭とそのつながりの価値や文化としての力について考えた。本節では、東日本大震災時における福島や東北の祭の事例、および2019年末から2021年時点でいまだ終息の兆しが見えていない新型コロナウイルスの感染拡大など、歴史的に何度も見舞われてきた感染症と祭の事例をもとに、祭という文化やそのつながりが社会の危機的状況においていかなる役割と意味を持ちうるのか探る。

筆者は田島祇園祭の関係者と参加者に対して2018年の7月から2021年5月までである一定期間を置きながら四年ほどフィールドワークを実施してきた²⁸が、その間に新型コロナウイルスの世界的なパンデミックという前代未聞の事態に直面した。聴き取りを試みる中で、生活に密着した切実な思いが反映されている声は女性に多かった。2020年度の田島祇園祭はかつてない事態を受け、多くの観客を集める神輿渡御や行列など行事は中止し、関係者のみによる御神事の実施という形がとられた。いくつかの行事の中止と御神事の実施という方法は、他の多くの大きな祭礼型の祭でも見られた。例えば、ユネスコ無形文化遺産にも登録され、田島祇園祭の形式の源流にもなっている京都の祇園祭においても、神輿渡御や山鉦巡行は規模縮小や中止がなされるなど、祭のほとんどが規模を縮小か中止を余儀なくされた。そして御神事の中に新たな行事が試みられるなどの取り組みが見られた。福島県南相馬市で毎年7月に実施される相馬野馬追祭も祇園祭同様に観客を多数呼び込んだ、長い歴史をもつ祭である。本稿に関する点で相馬野馬追には特筆すべき点がある。それは、東日本大震災の被災地で実施されている大きな祭の一つであり、祭とその開催が震災からの復興に関し、人と人や地域社会とのつながりと支えという意味で大きく寄与しているということである。被災者たちの復興への支えと原動力にもなってきたこの祭を、新たな新型コロナウイルスの感染拡大という危機を迎えていかに開催できるか、開催すべきか、復興からの生活への原動

力、人と人、人と地域のつながりの新たな切り結びという点において、非常に重大な問題を有している。それは生命や生活に直結する災害からの復興との関連という意味において、祭の意義と価値のあり方、切迫感が異なる点である。

震災とそれからの復興という文脈では、福島県に限らず、1995年に起きた阪神淡路大震災に際し二十余年余取材を続けてきた神社新報社の松本滋は、未曾有の事態で神輿渡御や祭祀儀礼が、神社の限られた中で祭典が行われることで祭を通して人々の心が一つになり、復興が進んでいった²⁹と述べている。そして、復興の礎は人と人のつながり³⁰だともいう。南相馬市の相馬野馬追に参加してきた住民の一人が、実行委員会が寄付を募るクラウドファンディング・サービス³¹で、自らの体験を次のように語っている。それは、「自分以外の家族の全員を津波で失ったが、その家族が残してくれたのが野馬追の衣装であった。自分と同じ境遇や経験を共有している人は地域の内外に大勢いる。祭をしている時ではないと嘆くより、祭があるから立ち直ろうと衣装を見るにつけ考える、祭を復興させるために頑張ろうと思える」という内容であった。祭は、亡くなった人が大切な人のために残していく生きる力のための時間と形であり、祭がつなぐもう一つのつながりと絆の姿といえる。2021年度は最大の注意を講じることで感染防止対策が十分とれると判断し、観客数と行事に大きな制限をして野馬追行事を実施する予定である。南相馬市長は取材に対し、「野馬追は地域の平和と安寧を願う。行事の継続と発展、実施によるコロナ³²への不安増大の両面を考えた」³³と答えている。

2019年末から直面している感染症の世界的なパンデミック下においては、祭の開催による人の集中から、かえって人命の生存を脅かしかねない危険をはらむため、やむなく多くの都市型祭礼で規模縮小や中止を招いた。祇園祭など夏祭の多くが疫病退散や厄除けを祈願することから始まったことを考えると、現在の祭と祭を取り巻く環境はパラドクスに満ちた状況にある。しかし、祭は観客を集中させるためだけにあるのではない。その根底にはその地で生きる、あるいはその地につながる多くの人たちの間で共有されていた真摯な祈りがあった。規模が縮小された京都祇園祭では、神輿がとどまる氏子地区の「御旅所」に祈りをささげる年配の人の姿が見られた³⁴。祭を支える人々の昔から変わらない思いの原型が認められよう。また、4月14日と15日にかけて二年ぶりに実施された岐阜県高山市の春の高山祭では、感染拡大防止のため屋台の練り歩きは中止し、保管蔵内での公開のみにとどめている。管理者の一人はNHKのニ

ユース番組の取材³⁵に対して「3密³⁶を避け、みんなで祭ができるようにがんばりたい」と話していた。また同じくNHKの番組で、福岡県の博多山笠の中止とこの祭に関わる人たちのドキュメンタリー番組が放送された³⁷。博多山笠に熱意を傾ける人たちの心境は「山のぼせ」とも呼ばれ、そのような一人一人の熱い思いがこの都市型祭礼を支えてきた。番組では祭が中止されたことで言葉にならない喪失感や危機感を訴える声を取り上げられていた。

日本国内にとどまらず世界中の祭やフェスティバルが、現時点では多くの人が一か所に集まることはできない状態にある。しかしながら、祭を通して人と人、人と地域は実は時間と場所を超えてつながり続け、困難な状況に直面しているからこそ、新たな絆が生まれている。インターネットで接続されたオンライン上のイベントが開かれれば、世界中のどこにいてもイベントやバーチャル体験を共有できる時代である。場所の共有はかなわなくても、未来への希望と祈り、困難や危機からの回復という課題と人間と人間の接触を促す祭の姿、文化を通じた人と社会の関わり方が問われているのだろうか。

祭が持つ価値は、行事と場所の共有にはとどまらない。筆者はむしろ、祭という文化を通して培われるつながりと絆³⁸=ソーシャル・キャピタルの意義と価値を見直すべきではないかと考える。山口睦は、震災によって形を変えながらも守られ、新たに作られていく人々のつながりこそが被災地の暮らしの文化である³⁹と述べている。祭の開催という共通の目標や危機管理についてそれぞれの場所で共に考えること、祭の意義や自分にとっての意味を考えることもまた、祭という文化資本のもたらす価値の一つとはいえないだろうか。このようなつながり方は、もはや地球上の誰もが逃れることのできない感染症の世界的な大流行という危機においても、人々の生活の立ち上がりと存続にとって不可欠なつながり・連帯と絆というソーシャル・キャピタルとして顕在的にも潜在的にも働き得るはずである。

高倉浩樹は、無形文化財が災害復興に一定の役割を果たすことを「減災無形文化遺産」と呼ぶことを提唱したい⁴⁰と論じている。自然災害あるいは感染症の世界的な流行などの危機に面して、無災いうのは不可能であるにせよ、「減災」ということは今後人類社会が目指すべき重要なキーワードとなるように思われる。

5. 社会における危機的な状況下の祭と信仰

世界中の祭が新型コロナウイルスの世界的な感染拡大という前代未聞の事態に見舞われている2021年5月現

在、祭を取り巻く状況は大きな見直しと変容を迫られることになった。日本のいわゆる伝統的な祭に限らず、多数の観客を凝集させるようなイベントの多くが、感染防止対策を講じる必要性に直面し、模索の中での開催や取り組みが続く。

田島祇園祭においては、2021年5月時点でまだ開催の方針は決まっていない。保存上の問題から屋台の解体収納が行なわれる予定であったが、これも人を集めるリスクを伴うというので中止された。現在町内の各お党屋組の収納庫には、各組（「町」と呼ばれる）の組み立て式の屋台が組み立てられた状態で保管されている。この屋台の組み立てが人手と時間を要する作業の一つであり、かつては祭の前日ごろに組の人が集められて分解した部品の一つ一つから大きな屋台を組み立てていた。近年では人手と時間不足によって、分解作業をせずに収納されるようになった。しかし組み立てたままでの収納は車輪に重さがかかること、日光や湿気をさらした状態で保管することは、大きな負荷がかかるという。そこで、お党や組の一つの中町組では、数年ぶりに解体作業を行う予定であった。しかしそれも、2021年5月時点で感染症の流行拡大が収まらず、観客を集めるリスクが伴うことから中止が余儀なくされたのであった⁴¹。

京都祇園祭は観客を集める山鉾巡行は中止、福岡の博多山笠も「昇き山(かきやま)」は観客凝集とともに激しい身体接触を伴うという点から中止が決定している。2021年5月に田島祇園祭の当番お党屋の女性の一人が話していたのは、何といたって人を集めるのが祭であるから、感染拡大が収まらない以上は祭の実施は大きな制限をかけて行なうのがベストであろう、あるいはワクチンがすべての人に行き渡らない限り、担当側の人間としては心から祭の開催を望むことはできない、という思いであった。感染防止対策の長期化によるストレスなど、感染症の流行拡大で誰もが共有して抱える問題を早い段階で語っていた。長年祭を支えてきた者としての思いと、命を守る母や妻としての思いが交錯する一端を表す一場面であった。感染症の流行拡大が始まる一年半前には、母から受け継いできた祭の重さがあることを教えてくれた女性の言葉であるだけに、一層事態の困難さが伝わる。

このような状況下、東日本大震災で原発事故と津波被害という2つの大惨事に見舞われた福島県南相馬市の相馬野馬追は、2021年5月の段階で観客数と行事を制限し、2年ぶりにすべての行事を有観客で行なう方針が決定した。第3節で触れたように、執行委員会や市長は、祭が地域の平和と安寧を願って行

なわれるものであること、また祭行事の継続と発展の面から踏み切ることにした、という内容の趣旨を發表している⁴²。

祭は元来、その力を頼むところの神々、聖なるものへの祈願と報告、感謝という目的をもって始められた「神のいるイベント」⁴³であった。日本の祭は稲作との関連が強く、五穀豊穰祈願や感謝報告の目的で始められたため、その成立から人間を超えた聖なるものの存在認識と、聖なるものと人間、社会との間の交流やコミュニケーションがその重要な構成要素であったといえる。

しかし、神ありとするイベントに認められる信仰の要素だけが祭ではない。倉林正次は、日本人や日本社会にとって祭という概念は、幅の狭いものではなく、広範囲にわたるものであり、神社や寺院の祭自体の中に、実は現代に生まれたような新しい形の祭やイベントの側面が含まれていたとも考えられると述べている⁴⁴。例えば、田島祇園祭の例でも祇園祭の一連の行事のほとんどすべてに会食や「直会」があり、地域色や祭の時期の旬の食べ物が用意されることがこの祭の大きな特徴でもあった。米山俊直は、都市の祭は住民の強いニーズを反映したものであり、都市空間が祭で一時的にハレの舞台に変貌したときに、一時的な「神」が示現する⁴⁵、と述べている。

新型コロナウイルスの感染拡大が新たな脅威となった2020年度の祭の多くで、人々を集める祭の大きな効果が、反対に命の危険に関わるものになったのであるから、祭の疫病退散や豊穰祈願どころではなくなってしまう。ところが、祭にはもともとコミュニティという、日常とはさかさまのあえて混沌とした状態が大きな意味を持つという側面がある。米山⁴⁶のいうようなれば「一時的な神の出現」は、祭に集う人々を非日常の状態に迎え入れ、そのことはまた無礼講の役割転倒の混乱の中にも失いかけた活力と絆を取り戻させる重要な機能いえる。一時的に顕出された、というよりはむしろ現代社会においては忘れかけられた神の再認識によって、祭の時間と空間の中に人々は神の存在と信仰をよみがえらせ、前代未聞の事態に対して祈願し感謝する心、あるいは生きる力をよみがえらせようとするのだとはいえないだろうか。

新型ウイルスによる世界的な感染症の流行拡大という非常事態に際しては、感染防止と命を守る行動が最優先されなければならない。同時に、日本の祇園祭のように本来は疫病退散のための町の浄化という大きな目的があったこともまた重要な一面である。その目的の両立を探るところに人間の知恵と工夫が新たに生まれ、祭という文化とその価値と意義が続

いていくと思われるのである。

6.現代社会に息づく祭と、そのつながり

没信仰化した現代に新たに生まれたイベントや催しには「神」がなく、したがって現代に新しく生まれた祭には、古来日本が持っていたような機能や役割は存在しないのであろうか。筆者の答えは、否である。というのも、祭の成立と大きな目的は神とのつながりや交感、祈願や感謝報告の点にあることは事実であるが、先に述べたように祭の意義は信仰と祈願だけにとどまるわけではない。「直会」に代表されるような人と人、人と共同体、あるいは社会との交流すなわちコミュニケーションと、その祭ならではのコミュニケーションによる新旧の世代のつながりの回復や、さらにいうと心身の健康が企図されているともいえるからである。田島祇園祭の例でいえば、直会で用いられる食事と酒が人と人とのつながりを確かにする重要な「媒介」になる⁴⁷、といわれる。

また祭自体にも、ターナーのいう非日常の身分逆転の儀礼すなわち「コミュニティ」⁴⁸とよばれる役割転倒の構造の中で、現実の個人相互の関係を回復するという目的がある。そのために祭を通してできる、あるいは継承される人々との連帯やつながりは、日常の人間関係やつながりを包摂しながらも、時空間的にそれを越えているものである。稲葉陽二は、祭には人と人との社会的な距離を縮める働きがあること、また祭を通して生まれた付き合いが日常にも反映され、人々の社会的距離が縮まり絆も深まる⁴⁹、と論じている。稲葉はこのような絆すなわちソーシャル・キャピタルによって、被災地での被害や困難な課題を乗り切ろうとしている⁵⁰、と述べている。また、山田浩之はこのような日常とは異なりながらも新たに接続していく可能性のある祭のつながりを「祭縁ネットワーク」とよび、祭を支える新しい関係性＝共同性である⁵¹こと、そしてこの「祭縁」が地縁あるいは血縁とは異なり「選択縁」⁵²であると述べている。

古い形の祭には、新しい変容を遂げてなおその根底あるいは中核に神とのつながり、神と人との交流をその目的に据える形式が続く一方で、日本人にとって祭は信仰面のみで捉えられるべきものではなく、古い祭の中に内在していた多くの要素が現代の位相で現れ、現代に新たな祭として作り出されているのが認められるだろう。人類社会殊に日本人にとって、祭には「交流」、「コミュニケーション」という大きな目的がある。その交流に神が表れてくるのが祭という非日常的な行事の大きな特徴といえるが、実はコミュニケーションは神と人に限らず、祭に参加し、祭を支える人と人の間でも盛んになる交流でもあった。

またその祭のコミュニケーションや交流とは、祭の周年性によって回復される⁵³つながりや連帯の中で継続されていくという性質のものである。そのつながりの持続の中に、絆=ソーシャル・キャピタルが醸成される。

誰もが人間関係における不信感や疎外感、孤独、不安や焦燥に囚われているような現代社会に祭の復興を提唱する倉林正次は、人々は真のコミュニケーションの場を求めており、そのような役割を果たしうる格好の場こそが日本の祭である⁵⁴と述べている。また祭は、元来人々を幸福にするために営まれてきた⁵⁵とも論じている。民族学者の端信之は、現代に見られる運動会や企業内の祭を称する催しは、神と人ではなく人と人とのコミュニケーションによって組織や人々の活力をよみがえらせることができる⁵⁶、と述べる。小松和彦は、一見するとハレ的な表情をした現代の都市に生きる人々が、実のところ画一化した日常生活に生きており、だからこそ神なき時代に「神のいる」ハレの祭を求めている⁵⁷としている。このように現代の祭を取り巻く諸相とその意義については、多様な意見が並立しそれぞれに正当性が認められる。一方で、これらの論考に共通しているのは、神の存在の認識や信仰が日本の祭には非常に重要かつ不可欠な要素であること、神と人、人と人の間の交流、コミュニケーションが祭や祭を取り巻く人々や共同体にとっていかに重要かつ本質的な意義を持つかということであろう。

祭は、人々を結びつける。それも日常を包摂し、日常をはるかに超えた形を見せている。祭を通したつながりでは、様々な背景を持つ人が違いを超えて祭の成功のために連帯する。そのつながりと絆が途切れそうになった頃、祭はその周年性からまたつながりと絆をよみがえらせる。そのようなつながりや絆は、社会の危機的状況や災害などからの回復にも寄与できる。祭を通して培われたおかげで、つながりと絆は人と人の間の相違や壁を越えて支えあい、助け合うことに即座に発揮できるのである。日本の祭に見られるつながりとその絆はまた、人々と社会の生きる力、活力そのものでもある。日本の祭には、祭を通して様々な違いや壁を超えて醸成されるつながりと、そのつながりの中に強固になった人と人、人と社会の間の絆が認められ、それが人々の生を互いに支え合う力にも通じているといえるだろう。

7. 「社会安定装置」としての祭とつながりの可能性

以上をふまえ、現代社会に見られるいまだ解決の道筋が不確かな危機状況に際し、日本の祭や祭のつ

ながりに何ができるのか、人々と社会の幸福につながる「社会安定装置」という視座から考えてみたい。

現代社会における社会問題と一言でいっても、多岐に渡った問題が未解決のまま存在するのが現状である。人類社会はいつの時代も、知恵と努力でその時々々の社会の様々な問題解決に取り組んできた。他方で、様々な位相から捉えられる差別や偏見に基づく古くて新しい問題群でも、いまだ解決を見ていない課題も多い。現代社会においては、孤独や疎外感に起因する課題は特に看過できない。第6節でふれたように、倉林正次が言う「真のコミュニケーション」を求めている人は皆無であろう。これは個人の問題というよりも、近代以降の先進とされる社会が近代国家の名のもとに孤独や疎外感を助長しなければ発展しないような構造に問題がありそうである。それはまた、便利さや合理性、ある意味での豊かさを求めてやまない現代社会の負の側面ともいえよう。生存と背中合わせの、現代の社会構造に起因する不安や焦りからは、おそらく誰一人として免れられない。日本の祭、ひいては人類社会の祭には、このような人類社会とその幸福のために何ができるのだろうか。

幸福とは非常に幅広く多義的な表現であって、究極には個々人それぞれのうちに見出されるべきものといえよう。かつて、植民地時代と呼ばれた時代には、地球上で覇権を拡大しつつあったいくつかの先進諸国が、いわゆる後進国や地域、植民地となった地域の文化や慣習を劣ったものとみなすような時期もあった。文化人類学という学問は、そのような植民地支配に伴って発展してきた学問であった。しかしおそらくは完全に正しい評価も方法もない。その反省から、文化の間には優劣がなく平等であることを説いたのがボアズの「文化相対主義」に基づく主張⁵⁸である。人類が複雑かつ多様に満ちていることを反映するのが社会幸福の実際のあり方であって、一つの物差しや見方で答えが出ることはないといえるだろう。ボアズが戒めたのは、人類進歩の頂点と見誤り傲慢にふるまいがちであった⁵⁹当時の西洋中心主義であった。国家間、地域間にとどまらず各個人間においても、違いを違いとして認識し、あるいは受容して、排除したりその理解をあきらめたりせずに、異なるものの間の「相互理解」をどのように築いていくかは、今も難しい課題として残されている⁶⁰。

グローバル化した現代社会に生きる全ての人々が、各人の出自や文化的な相違、あるいは先の見えない不安や焦燥等から生じる社会的な問題からは免れない状況にあるといえる。そしてこれらの社会問題は、時代が進むにつれむしろ増加しているようにも捉えられる。地球規模でのつながりが容易に、しかも一瞬

にして可能になるような現代に生きる人々にとっては、そのようなつながりは一方で、崩壊しやすくまた寸断されやすい一面のあることを、多くの人々が体感的に理解しているのではないだろうか。なぜなら一瞬でつながるような接続は、容易である反面、祭を通して様々な困難や危機を乗り越えながら育まれ続けるような、一朝一夕には決してできないつながりやその中の絆のような効果はないといえるからである。困難や危機を乗り越えるからこそ、強靱さや柔軟性が培われていく。そしてその強靱さや柔軟性をもって、人と人、社会は結びつきや絆を維持していこうと努力を惜しまないことで、互いの理解や信頼を育んでいくことができるものと思われる。そして現代社会に生きるすべての人にとって、自分が帰属する、あるいは関与できる「社会が安定する」ことには大きな安心感と意義が見出せるのではないだろうか。社会が安定するということは、人と人の関係やつながりが安定するということにも通じている。また反対に、人と人の関係やつながりが安定することは、人が構成する社会が安定する、ということでもある。人が成長し、変わっていくように人と人との関係、つながりも変容していくものであろう。社会が変われば、それに即して文化も変わらざるを得ない。変化、変容それ自体は決して人間社会にとって悪いことばかりではない。むしろ前向きな変容は、維持と継承にとって是不可欠な要素であることは先にも述べた。そして、安定していく人と人とのつながり、結びつきや絆とは、一朝一夕にできるようなものでもない⁶¹のである。継承と変遷という時間と労力を費やしてできたつながりの中に、ようやくして強固な絆が芽生える。祭という文化とも祭の持つ重要な価値であるつながりと、その中に育まれる絆を持続させる努力とは、変容という新たな要素の付け加えと既存の関係の編み直しともいえるのである。

祭に人が魅了されるもう一つの側面には、不安な世の中に対する非日常的なはげ口、という意味も認められる。社会的距離を縮め、あるいは転倒させた非日常という祭での人間関係は、日常の不安や抑圧から逃れられない人々の鬱憤を集団で晴らす機会なのである。この時、祭に団結する人々の共通の敵は、特定の個人ではなく日常の不安要素と社会である。そしてそのような社会不安を、共同体や集団で宗教的に解決させようとする方策の一つが日本の祭でもあった。世界的には稀であるが、近代以前から日本の宗教は個人よりも、人間関係の上に成立している⁶²といわれる。したがって、共同体の神や統治者一族の信心する神などが、祭で人々と集団の間で祀られやすかったこともまた日本ならではの特徴の一つといえよ

う。田島祇園祭についていえば、町を守って下さっている神の祭を町民自身の手で行ないたい、そのような信仰、神の存在が日常生活の中にあるために生活に安定感が出やすい⁶³、という説がある。この地に育ってきた1970年代生まれの筆者には、日常生活では神の存在の認識などは、祭の時期に神や信仰を何か特別なものとして感じることもの方が多かった。しかしフィールドワークを行なってみると、神や信仰とこの祭との関連は、個人や家によって大きく違いがあった。何世代にもわたって米作りをしている家の主は筆者の同級生であるが、地域の神社を通して祭の行事に小さい頃から参加させられてきた、それが自分にとっての当たり前だったと話している。筆者と同じお党屋組の町内に住む同級生の一人は、若い年頃で父親を亡くしたため、自分もまだ若いうちから家の当主として祭の準備に加わらなければならなかった。マニュアルなどはないが、祭の儀礼やしきたりとは知らずに父親の生存中に一緒に御神事や行事に参加した記憶が、現在の祭の準備や参加に大きく役立っている、と話す。筆者と同世代の彼らにも、無意識にいわば自然に日常の中に田島祇園祭の御神事と神の存在があったといえよう。

神の存在、信仰がなければ祭は「社会安定装置」としての役割を果たすことはできないのだろうか。第6節で述べたように、筆者の見解では否である。仮定の敵を設定する場面はあるにせよ、人々は祭を通して心一つにすることができるのであり、その団結と連帯は神の力にも匹敵しうる可能性をもつのではないかと論じた。神の存在もさることながら、神を信じる人々の信頼や信仰の姿勢やあり方こそが重要である、とはいえないだろうか。これは神と人、人と人の間の相互性の問題、課題でもある。柳田國男は、「物忌の条件を守って黙って慎み深い拝礼をしている所に、無限の信頼が汲み取られる」⁶⁴であるとか「無言の祈請の必ず聴取されることを信頼し、心の平和を保ちえた」⁶⁵など、祭にあるのは信仰ではなくむしろ「信頼」である、と述べている。「社会安定装置」として日本の祭が果たしうる最も重要な役割とは、祭を通して築かれるつながり・結びつきと、そのつながりの中に培われ持続する絆の創出にあると筆者は考えている。このような祭を通じたつながりと絆は、様々な位相において現代社会の問題に大きく寄与することができる。祭で築かれるつながりとは、日常生活上の関係を包摂しながらもそれらをはるかに超えた縦と横の広範囲にわたるつながりであり、しかも昨今では選択性と自主性という特徴を有している。祭のつながりは、人々の生きる力や活力の表れでもあって、そのつながりと絆の持続は地域のレジリエ

ンス力にも通じている。非日常の神の存在認識が日常のうちにもあるということは、神への信頼が人と人との間の相互信頼に通じているとはいえないだろうか。祭を通して築かれたつながり・結びつきは、人を信じ、社会を信じることをも可能にするだろう。相互信頼はつながりの中に育まれる人と人、人と社会の間の絆を作り出す。そして絆を内包するつながりは、今後の現代社会においてより一層、多岐に渡る社会問題に対応しうる地域や社会のレジリエンス力、相互扶助、共助の基盤となって作用する。またお互いや社会を信じ合える社会を安定させていくような力として貢献することができるだろう。柳川は、管理の行き届いた、あるいはテクノロジーの発達が進み能力の向上を求める社会は、宗教も変容させて人間的な接触を失わせる⁶⁶、と述べている。人間的な接触とは、言葉を変えて言うと「ふれあい」ということである。それは人と人が同じ場所、あるいは行事の経験や思いを共有することで生まれる人としての互いの心と心の交流と、交流による絆の醸成の重要性を示している。

8. 結び

元来、日本の祭のみならず祭や儀礼の多くが、神と共にあった。神との交流をハレの日に行なえることで、人々は日常生活にリズムを生み出し、日常とは逆転した関係や振る舞いの中で、生きる活力を取り戻してきた。祭とその行事を通して、人々は失いかけていた活力、生きる力をよみがえらせようとしてきたのであった。神崎宣武はハレとケの循環が「社会を安定させる」⁶⁷と述べている。それはこの循環が、現代の科学の及ばない領域を信仰や祭が担っているということを示している。同じく神崎は、現代社会においては定年後などに仕事を離れてからは人々の連帯や、自身の居場所が失われやすく、地域や文化の役割を団塊の世代の人たちが熱心に見直し始めている⁶⁸、と論じている。

日本の祭を通したつながりは、最初から社会的距離⁶⁹を縮めたところから成立する。このつながりは、祭の周年性によって弱まりかけた頃に再び強化あるいは新たに更新される。それはまた、つながりと絆が一朝一夕にできるものでもないことを意味する。加えて、柳田國男がいうように祭は人のみならず、森羅万象のあらゆるものとのつながり、その中にある絆

をよみがえらせようとしていた⁷⁰のである。祭を通したつながりと絆の形成は、人と人、人と社会、神と人にとどまらない。目には見えない自然の力、あらゆる存在とのつながりの中に人間もその一部として共存し、生活の中に非日常の祭が営まれてきた。

日本の祭とそのつながりは都市化や近代化が進んだ現在でも人間は自然の一部であり、だからこそ、神なき時代とよばれる現代に、神の力に匹敵させ得るような人と人、人と社会そして人と自然のつながりが重要な意義と役割を持ちうるといえよう。現代社会に生きる人々や集団が、国や地域、世代などの違いを超え、自然の一部である認識を取り戻すのが元来の祭であった。そしてまた、そのような祭を通して育まれたつながりやその中の絆によって、自分や自分以外の存在を信頼する心を取り戻すことができた。さらには幾多の様々な危機を乗り越え、改めて生きる力をよみがえらせることができるとはいえないだろうか。そしてそれは、決して自分一人や祭の営まれる地域や集団、組織にとどまらない。祭は、祭の成功と持続という共通の目標をきっかけに、つながり・結びつきや絆を通してあらゆる人々を受け入れる居場所を創出する可能性を持っている。そして空間と場所、違いを越えてつながり続けることで人々は互いに支え合い、助け合い、信じ合う力、生きる力を回復させることができる。

人類学者の大村敬一は、今後の人類社会においては、自己にはない独自性を相互に生かし合い、差異を残したまま微調整しあうことがより重要だと述べている⁷¹。周期性を持つ祭の中にはあらゆる生命を持続させるつながり・結びつきと絆が存在し、つながり・結びつきと絆は、祭が繰り返して持続していくことで強固かつ新たに持続される。そのようなつながりは新たな違い受け入れ、互いに認め合い、微調整をくりかえしながら持続されていくことだろう。つながり方も絆の形も、その時々のある方で変化を見せる。そしてそのつながりと絆によって、伝統の祭といわれる祭から奇祭といわれる祭、現代的な新しい祭まで、多様な位相を見せる祭の文化とその役割・意義が、持続と継承とを適えてきたといえるのではないだろうか。

(Received: June 18, 2021)

(Issued in internet Edition: July 1, 2021)

¹ 「まつり」については、昨今では「祭り」と表記されることが多いが、本稿では先行研究の柳田國男の『日本の祭』(1942)に従って「祭」という表記を用いるものとする。

(参考文献：柳田國男 1942 『日本の祭』(初出：弘文堂) 柳田國男 1969『定本柳田國男集第十巻』筑摩書房 p.182)

² 八幡和夫、西村正裕 2006『日本の祭りはここを見

る』祥伝社 p.14

³ 山田孝子、小西賢吾編 2015『祭りから読み解く世界』英明企画編集 p.10

⁴ 「文化」とは多岐に渡る非常に多義的な言葉であって、これまでも様々な定義と解釈がなされてきた。また「文化」に「資本」をつけた「文化資本」という表現も登場した。「文化」については、本稿では多くの定義と解釈の中からいくつかを視座に据えて論じるものとする。1つめに、ピーコックのいう「文化とは、特定の集団によって学習され共有された、自明かつ極めて影響力のある認識の仕方と規則の体系」、2つめにギアツのいう「文化は人間の経験を選択し、それを系統づけることによって、その意味付けをする。(略)広い意味で人々がそれを通して自らの生を解釈する様々な形態のこと」、そして3つめに米山俊直の「文化とは生活そのものである。しかし全く重なるものではなく、中心をずらした二つの円のようにそれぞれにはみ出した部分がある」という定義を用いる。また、マイクロ・エスノグラフィーの視点から、箕浦康子のいう「文化は意味の流れとされ、個々人は、その生活経験や歴史、複数の社会集団への帰属性など、そのポジションの取り方で多様な自己呈示をする存在」という捉え方を踏襲する。また、フランク・ボアズのいう各文化は平等なものであり、相対的なものであるという現代における文化人類学の根底にある倫理的な文化観に即して論述するものとする。

「文化資本」については、文化経済学者のスロスビーが「文化的価値を具体化し、蓄積し、供給する資産」であり、「知的資本のストックは放置されることでこの価値を減少させるし、新しく利用されることで価値を増大させもする。」と定義している。本稿では以上の定義と論考を用いて論じる。

(参考文献)

ピーコック、ジェイムズ 1993

今福龍太訳『人類学とは何か』岩波書店

米山俊直 1986『都市と祭の人類学』河出書房新社 p.111

ギアツ、クリフォード 1987 吉田禎吾他訳『文化の解釈学1』岩波書店

箕浦康子 1999「エスノグラフィーの作成」箕浦康子編著『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房 p.85

スロスビー、デイビッド 2001 中谷武雄・後藤和子監訳『文化経済学入門』日本経済新聞社

⁵ 「コミュニティ」の捉え方と定義も多様である。かつて官庁用語として普及しこの用語は、現在では都市人類学の米山俊直のいう、家族と行政単位の間にある近隣集団、それも多くの機能を担った都市の町内や農村の集落の機能を欠いた地縁集団という解釈が適しているように思われる。

(参考文献)

米山俊直 1986 前掲書

⁶ 柳田國男は『日本の祭』で信仰を共にしない、審美的な立場から見の人たち、すなわち「観客」が祭の歴史上に現れ始め、観客の出現が祭から「祭礼」への変遷であるとしている。また祭を営む村人も「見られる祭」を美しくしようと心がけた、と述べている。

(参考文献)

柳田國男 1942 前掲書

⁷ 倉林正司 1975 『祭りの構造 饗宴と催事』日本放送出版協会 p.11, p.228

⁸ 柳沢新治 1984 『祭りを推理する』東洋書院 p.261

⁹ 柳田國男 1942 前掲書 筑摩書房 p.219

¹⁰ 藤川美代子 2019「はじめに」『人類学研究所研究論集第7号2019年 定着／非定着の人類学』南山大学人類学研究所 pp.1-3

¹¹ 藤川美代子 2019 前掲論文 p.1

¹² 南会津町教育委員会 1986『重要無形民俗文化財田島祇園祭のおとや行事』歴史春秋出版株式会社 p.1

¹³ 「田出宇賀の神」とは田島町史(田島史編纂委員会『田島町史第4巻(民俗)』)、田出宇賀神社社事によると稲作に関係の深い穀物、農業神である「宇迦御魂神」とされる。

¹⁴ 田島町史編纂委員会 1977『田島町史第4巻(民俗)』歴史春秋社 p.255

¹⁵ 南会津町教育委員会 1986 前掲書 p.10

¹⁶ 田島町史編纂委員会 1977 前掲書 p.256

¹⁷ 現在では、お党屋本宅とお党屋を勤める家の主人「お党屋本」(おとやもと)と呼んでいる。しかし、お党屋本宅において祭期間に掲げる木札には「お党屋本陣」と記されており、当時の呼称が祭に関するしきたりの中で受け継がれているのがわかる。お党屋本は、その年の当番お党屋を中心に、去年の当番お党屋と、来年の当番お党屋が協力して祭に携わる。

そのため前後2年間の当番お党屋とお党屋組の人たちによる「受け渡し」「受け取り」という行事が重視され、それがこの祭を円滑に実施できる大きな要素になっている。それはまた、この祭の周年性を支えるつながり方の顕出の一つである。

¹⁸ 田島町史編纂委員会 1977 前掲書 p.258

¹⁹ 柳田國男 1942 前掲書 p.176

²⁰ 2020年度田島祇園祭、中町組お党屋本の談話(2020.1、2020.7 聴き取り)

²¹ 田出宇賀神社宮司の談話(2020.5 聴き取り)

²² D.マツモト 2001『文化と心理学』北大路書房 p.28

²³ D.マツモト 2001 前掲書 p.29

²⁴ パットナム、ロバート 1993 邦訳河田潤一訳『哲学する民主主義』

²⁵ 稲葉陽二 2016「都市祭礼とソーシャル・キャピタル」山田浩之編著『都市祭礼文化の継承と変容を考え

る』ミネルヴァ書房 p.21

²⁶ 稲葉陽二 2016 前掲書 pp.38-39

²⁷ 山田浩之 2016 「都市・祭礼・文化」山田浩之編著『都市祭礼文化の継承と変容を考える』ミネルヴァ書房 p.5

²⁸ 筆者は自身が居住する福島県南会津町の田島祇園祭で、関係者（お党屋本、お党屋組、神社関係者、参加者数名、祭を直接は担っていないが関心のある町の人たち）に祭の準備期間、祭終了後や日常生活において数日あるいは数か月のタームを設けて聴き取りを実施した。祭研究と説明して行なった構造的なインタビュー、メモを取りながら行なったフォーマル型のインタビュー、知古の間柄ということもあってインフォーマルな対話、日常会話的な形をとったインタビューの3つのタイプを行なった。

²⁹ 松本滋 2015 「阪神淡路大震災に見る復興の原動力」神社新報社『東日本大震災 神社・祭り—被災の記録と復興—』 p.376

³⁰ 松本滋 2015 前掲論文 p.385

³¹ クラウドファンディング・サービス GoodMorning 「一千年続く日本一の侍・馬事文化「相馬野馬追」を守りたい！」支援プロジェクト活動報告 HP

<https://camp-fire.co.jp/projects/view/300692?utm-campaign> 2021.5.29 閲覧

³² 新型コロナウイルスの感染拡大のこと

³³ 福島民報 2021年5月22日朝刊記事

³⁴ 筆者が京都市で2020年7月に行なったフィールドワークにおいて確認された。

³⁵ NHK「列島ニュース」2021年4月14日放送

³⁶ 新型コロナウイルスの感染拡大防止策として「3蜜：1密集、2密接、3密閉」を避ける行動をとることを現在要請されている。施設や事業所、店舗などにポスターが貼られ、テレビ番組やHP上でも繰り返し注意喚起がされている。

³⁷ NHK「疾走する男たち 山笠その瞬間」2020年7月28日放送

³⁸ つながりと絆の違いについては、ここでは「つながり」は連帯や結びつきを指し、「絆」はその連帯や結びつきの中に生まれる人と人の間の相互の信頼、助け合い、支え合いといった概念、要素をさす。パットナムは「ソーシャル・キャピタル／社会関係資本」²⁵ともよんでいる。つながりという結びつきの中に、絆が作られる。

³⁹ 山口睦 2018「編者あとがき」山口睦、高倉浩樹編『震災後の地域文化と被災者の民族誌』新泉社 p.282

⁴⁰ 高倉浩樹 2018「福島県の民俗芸能と減災無形文化遺産」山口睦、高倉浩樹編『震災後の地域文化と被災者の民族誌』新泉社 p.143

⁴¹ 2020年度の当番お党屋組党本の談話（2021年5月聴き取り）

⁴² 福島民報 2021年5月22日朝刊記事

⁴³ 小松和彦「神なき時代の祝祭空間」小松和彦編『祭りとイベント』小学館 p.37

⁴⁴ 倉林正次 1975 前掲書 p.13

⁴⁵ 米山俊直 1986 『都市と祭りの人類学』河出書房新社 pp.203-204

⁴⁶ 米山俊直 1986 前掲書 p.204

⁴⁷ 柳川啓一 1971 「祭の神学と祭の科学」柳川啓一 1987『祭と儀礼の宗教学』筑摩書房 p.108

⁴⁸ ターナー、ヴィクター 1969 富倉光雄訳 1976 『儀礼の過程』新思索社 p.128

⁴⁹ 稲葉陽二「都市祭礼とソーシャル・キャピタル」2016 山田浩之編著『都市祭礼文化の継承と変容を考える』ミネルヴァ書房 p.40

⁵⁰ 稲葉陽二 2016 前掲論文 p.20

⁵¹ 山田浩之 2016 「新しい共同性を構築する場としての祭」山田浩之編著『都市祭礼文化の継承と変容を考える』ミネルヴァ書房 p.58

⁵² 山田浩之 2016 前掲論文 p.77

⁵³ 米山俊直 1986 前掲書 p.204

⁵⁴ 倉林正次 1975 前掲書 p.228

⁵⁵ 倉林正次 1979 『日本の祭・心と形』主婦の友社 p.166

⁵⁶ 端信之 2012 「まつりがよみがえらせる地域のつながり」京雅也・弘元ゆかり編『まつりが育む地域の力 CEL100号』大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所 pp.8-9

⁵⁷ 小松和彦 1997「神なき時代の祝祭空間」小松和彦編『祭りとイベント』小学館 pp.37-38

⁵⁸ 沼崎一郎 2005「文化相対主義」綾部恒雄編『文化人類学 20の理論』 pp.55-71

⁵⁹ 桑山敬己 2019「文化人類学」桑山敬己、島村恭則、鈴木慎一郎『文化人類学と現代民俗学』風響社 p.20

⁶⁰ 西本太 2005「フィールドワークと文化人類学」奥野克己、花淵馨也共著『文化人類学のレッスン—フィールドからの出発』学陽書房 p.4

⁶¹ 稲葉陽二 2016 前掲書 p.32

⁶² 柳川啓一 1976 前掲書 p.74

⁶³ 南会津町教育委員会 前掲書 p.12

⁶⁴ 柳田國男 1942 前掲書 p.311

⁶⁵ 柳田國男 1942 前掲書 p.313

⁶⁶ 柳川啓一 1942 前掲書 p.30

⁶⁷ 神崎宣武 2010「ハレとケの循環が社会を安定させる」伊藤学編『商工ジャーナル』株式会社商工中金経済研究所 p.62

⁶⁸ 神崎宣武 前掲記事 p.65

⁶⁹ 2021年5月時点、新型コロナウイルスの感染拡大で盛んにいわれているところの「ソーシャル・ディスタンス」とは異なり、心理的、階層的な距離をさす。

⁷⁰ 安藤礼二 2015「解説」柳田國男『新版日本の祭』
角川書店 p.261

⁷¹ 大村敬一 2020「地球と人類の未来」大村敬一、湖

中真哉『「人新世」時代の文化人類学』放送大学教育
振興会 pp.255-257